

松蔭 校長室だより

—校長から保護者の皆さまへのメッセージです—

2017年10月2日 発行

松蔭中学校・高等学校

校長 浅井宣光

知恵をふところに抱け。彼女はあなたを高めてくれる。

分別を抱きしめよ。彼女はあなたに名誉を与えてくれる。 (旧約聖書 箴言 4:8)

苦手な数学

「なぜ勉強しなければならないのですか？」 　いつか生徒から質問されるかも知れないと待ち受けていますが、今のところその機会はありません。大上段に構えて「自分の興味関心を深めることができれば将来の可能性が広がるし、生物学的には十代のうちに脳細胞に刺激を与えて発達させることになる」などと答えようかと考えてみましたが、中高生のうんざりする顔が思い浮かびます。

私ごとで恐縮ですが、昔から数学が大の苦手で、中学時代の定期考査で一度だけ満点近い成績を取ることがあって我ながら大いに驚いたものの、案の定その後の成績は急降下。兄弟たちも数学が苦手で、これは血筋だから仕方ないと家族は妙な慰めをしてくれたものでした。高校入学後も「数学は不得意」という思い込みが先に立ち、嫌いだから予習もせず、授業も苦痛でしかないという3年間を過ごすはめになりました。ところが大学生活を送り始めてしばらく経ち、何を思い立ったのか記憶が定かではないのですが、書棚に新刊同様の(勉強していなかったわけですから当然ですが)チャート式数Ⅰの参考書を見つけ、取り出して読んでみたのです。テストや成績から解き放たれて肩の力が抜けていたためでしょうか、暇つぶしとばかりに読み進めると、あれ程嫌だった数式を見ることも例題の解説文も苦痛に感じないことに我ながら驚いたのです。人生に「if」はなし、とはいえ、中学時代の授業でこの「感覚」を一度でも体感できていれば、ひょっとすると理系分野にも自分の道が開かれていたかも知れない、とあらためて思います。苦手意識が先に立ち、おもしろくないからと、将来の選択肢を自ら狭めてしまった学生時代を少し悔やんでいますので、なぜ勉強する必要があるのか、という質問されることがあればこのエピソードを伝えようと考えています。

数学の世界での最高荣誉であるフィールズ賞受賞者、広中平祐さんがその著書『生きること学ぶこと』(集英社文庫)に次のような一節を記しておられます。

「自己の中に眠っていたまったく気づかなかった才能や資源を掘り当てる喜び、

つまり新たな自己を発見し、ひいては自分という人間をより深く理解する喜び」

私も授業を担当していますが、興味深く引き込まれるような授業づくりを通して、生徒自身の中に眠る資源を上手に掘り当てて新たな自己を引き出す作業、すなわち生徒自身が、広中氏のいう「喜び」を自らのうちに感じるができるよう導くことに、教員としての責任の重さを痛感します。このことは本校の教員全員が共有し、また世の教師が常に意識しなければならないことだとあらためて考えています。

人様(ひとさま)の人生に学ぶ ―9月の平和講演会から―

年度初めを除き、学期ごとの始業式、終業式を中学・高校合同で行っています。12才から18才までの異年齢の少女たち一人ひとりの心に響く原稿を考え、人生の先輩としての良い講話作りをすることに、毎回難しさを実感させられています。先日、校内でいくつかの学年を対象とした「平和について学ぶ講演会」がありました。平和をテーマとする総合的学習の一環です。平和のための取り組みのほか、勉強することの意味や将来の進路、英語学習の秘訣などもアドバイスしていただき、有意義な講演会となりました。この紙面を借りてその内容を紹介したいと思います。

9月14日、高3生・中3生が瀬谷(せや)ルミ子さんの講演を聞きました。瀬谷さんは国連PKO勤務などを経て、NPO法人日本紛争予防センターの一員としてアフリカの紛争地域やスリランカ、カンボジアで復興、平和構築、治安改善、兵士の武装解除、PKOの軍人や警察・文民の養成などの活動に取り組んでこられました。その活動は、高校の英語教科書「New Crown 3」にも紹介されています。彼女がこの活動を志すようになったのは、高3の時に授業で見た、アフリカのルワンダの難民キャンプ撮影された1枚の写真でした。彼女はその時まで、将来の職業や進路についてあまり考えておらず、人に優るものが自分には何もないと思い込んでいたそうです。しかし、息を引き取った母親にすがりついて泣く幼児の姿を見て、難民支援の活動をやろうと決意し、海外での支援活動には英語が必要だからと、英語だけは誰にも負けないという思いで必死に勉強しました。

彼女は、その時まで気付くことのなかった新たな自己を1枚の写真から発見したのだと思います。紛争終結後の国々で、傷ついた女性に対して女性としてできること、女性にしかできない支援がある。幼い頃から少年兵士として軍事訓練を受け、武器を使うことしか知らずに大人になった青年たちを社会復帰させる支援もあると、現地での多様な復興支援の様子を具体的に話されました。

講演の最後に英語学習の秘訣を教えてくださいました。それは「妄想英会話」。今でも重要な交渉に臨む際には、交渉の様子をイメージして頭のなかで英会話をしておくそうです。いろいろな場面を想像して一人で英会話。高校生にとってもスピーキングの良い訓練となりそうです。

翌週にはフリージャーナリストの西谷文和(にしたにふみかず)さんの講演を高3生が聞きました。昨年度は中3生も出席しましたので覚えている生徒もいるかも知れません。彼はイラクやアフガニスタンなど中東紛争地域取材し、戦火の中で死と隣り合わせの生活を送っている子どもたちや、爆弾や地雷で怪我をした子どもたちの支援に取り組んでいます。ドイツ西部のオーバーハウゼンにある「ドイツ国際平和村」では、50年前の設立時から中東やベトナムの戦場で傷ついた子どもたちを受け入れ、治療とリハビリを行っています。日本人医療スタッフも多く働いており、子どもを預けている紛争地域の住民からの日本の平和貢献に対する評価が非常に高いことも紹介していただきました。大学卒業後、市役所職員として働いていた彼は、フリージャーナリストとして活動することを30代になってから決心したそうです。学生時代は勉強嫌いで、英語の成績も悪かったという彼は、紛争地域で情報を得て交渉するための英語、現地の歴史や地理に生活の知識、戦場で使用される劣化ウラン弾のしくみや影響など、英語や地理歴史、理科などを懸命に自学自習したそうです。

(裏面に続く)

戦場となり荒れ果てた都市で、学校の教室に

残っていたピアノに向かい、子ども時代に習った「むすんでひらいて」を弾いた時、音楽なんて何年も聞いていないという兵士との間に深い心の触れ合いを感じることができた。音楽の勉強も無駄ではない。今、勉強することは決して無駄になることはない、生徒たちに語りかけていただきました。「学歴は関係ないが勉強だけは必要」という言葉は強く心に残りました。

お二人の講演は平和についての講演と銘打ってはいますが、これまでの生き方をありのままに語っていただき、まさに人生勉強の講演会となりました。中学生・高校生が父母や家族、学校の先生以外の大人の人生に触れる機会は多くありません。今後も人様の人生から学ぶことができる機会をできるだけ多く用意したいと考えています。

生徒に将来のことを尋ねてみると「将来のことは具体的に決まらず、つきたい職業もまだ思いつきません」と答えることがあります。その時には「人様の人生に学んでみては」とアドバイスすることにしています。家族でも先生でもよい。本を読んだり映画をみたり、教科書に登場する人でも、歴史上の人物でもよい。人生を自分らしく誇りをもって歩んでいる人の人生を知ろうということです。「耳勉強」やら「目学問」などの言い方がありますが、まさに自分以外の人生を読む、見る、聞くということをしてみるわけです。「知恵」と「分別」を人様の人生から学びながら中学、高校時代を過ごし、誇りある素敵女性へと成長することを期待しています。

高2「大学特講」から駅弁が誕生。修学旅行の昼食に。

新幹線の神戸駅コンコースに駅弁屋さんがあり、「ひっぱりだこ飯」「あっちっちすきやき弁当」など数多くの名物駅弁が販売されていて、店の前に立ち止まってはショーケースを眺めてしまいます。

昨年春、山陽・九州新幹線相互直通5周年を記念して、新作駅弁「くまモンのごちそう弁当」が販売されました（現在は販売終了）。神戸松蔭女子学院大学都市生活学科とJR西日本、お弁当の淡路屋さんがタイアップし、九州新幹線で神戸・熊本間2時間45分、鹿児島中央まで3時間29分と訪れやすくなった南九州の魅力をアピールする企画から生まれました。学生たちの提案で、熊本「あか牛」のすき焼きなど現地の名物料理をくまモンのおにぎりとともに詰め合わせ、店頭販売では非常に好評だったそうです。

今回は、今年度の高2生が受講している大学特講の授業から、中3・高2修学旅行の初日の車内昼食弁当が誕生したというお知らせです。高校2年生のコースⅡの生徒が選択科目として受講できる「大学特講」は神戸松蔭女子学院大学の先生方の指導で、大学での様々な学びを高校時代に体験しておこうという講座です。学部や学科、学問分野の概要を早い段階に知ることができますので、内部進学希望者のみならず、外部進学希望者の進路選択にも役立っているようです。各学部や学科の紹介、英語のスキルアップをはかる講座から中国語やハングルの入門講座、心理学や幼児教育、文学、哲学からファッションや建築など実に様々なジャンルの講座が用意されています。



(くまモンのごちそう弁当)

1学期の大学特講では25名の高2生徒が、都市生活学科「食ビジネス専修」でマーケティングの講座を受講し、「食・地域の魅力発信」をテーマに商品開発にチャレンジしました。5グループに分かれた生徒たちはそれぞれのお弁当を考案し、淡路屋の担当者さんにプレゼン。アレンジが加えられて修学旅行用の弁当が完成しました。試作段階の弁当は見せていただきましたが、実物は当日までどうなっているかわかりません。残念ながら店頭販売はなく、本校の修学旅行での提供のみとなります。中3生、高2生の皆さんは修学旅行当日を楽しみにしていただきたいと思います。

「英語の松蔭プロジェクト」展開中です

より高度なコミュニケーション力をつけたいと希望する生徒の声に応えるため、「英語の松蔭プロジェクト」と銘打って「英検準1級講座」や「インターナショナルスクールでの土曜学校アシスタント」のプログラムを企画したことは、これまでの校長室だよりでお伝えしているとおりです。現在の状況をお知らせしたいと思います。

3月開講の英検準1級講座は18名が受講しました。そのうち2名が6月の第1回英検で合格し、現時点で6名の生徒が準1級を取得しています。今週末の第2回、年明け1月の第3回でもチャレンジすることを期待したいと思います。なお来年1月には校内での英検、TOEIC全校受験を予定しています。松蔭生全員が各自の目標とする級の取得、TOEICスコアアップを目指して頑張ってください。

インターナショナルスクール「聖ミカエル国際学校」での土曜学校アシスタントのプログラムは先月からスタート。高3の5名の生徒がすでに3回、土曜日の英語オンリーのアシスタントを体験中です。引率のハートレス先生、ウォルターズ先生によれば、5名の生徒は「shy」(恥ずかしそう)だったけれど、しだいに「talkative」(心開いてうちとけた)になっていったとのこと。6年前からミカエル国際学校の校長を務めておられる英国人女性ジル・タイラー先生とも、今後も様々な交流を広げていこうと話合っています。(写真はアシスタントの生徒と児童の様子)



なお国際交流の取り組みでは、毎年夏休みにニュージーランドの姉妹校 St. Peters 校へ短期語学研修生を派遣していましたが、今春より新たに 春期短期交換留学制度がスタート。現在 2018 年春期留学生を中3、高1生から募集しています。両校から2名を相互派遣することになっており、松蔭生は3月中旬から現地で約3週間滞在し、帰国後、先方の女子生徒をホストファミリーとして受け入れるというプログラムです。

さまざまな機会を利用して英語力を中高時代に最大限に伸ばし、グローバルな交流を深めて将来の礎(いしずえ)としていただきたいと思います。